

題目

「自己志向他者志向エゴグラム I U E 下位尺度の自己志向「順応した子ども」 I A C と他者志向「順応した子ども」 U A C の心理機能比較」

著者

西川和夫（財団法人田中教育研究所）

掲載誌

交流分析研究（日本交流分析学会） 2013 年 第 38 巻第 2 号 114~127 ページ

分類

質問紙調査統計研究

問題と目的

共分散構造分析を適用し、エゴグラム I U E 下位尺度の自己志向「順応した子ども」 I A C と他者志向「順応した子ども」 U A C それぞれが優位に作用する心理機能の比較を行った。複数心理尺度との相関を求めた先行研究の結果において、I A C と U A C は尺度得点が高くなると不適応な心理状態を招きやすくなる傾向を示したが、両者の相関パターンはそれぞれ異なっていた。全般的に、I A C は自己そのものが広汎に不安定な機能不全に陥る傾向を示し、U A C は、他者に対して受動的自己抑制的であることによる適応困難に止まる傾向を示した。以下研究 1 と研究 2 で、I A C および U A C それぞれが優位に作用すると仮定される心理機能を分析する。

研究1

目的 I A C において U A C より優位に作用すると仮定される心理機能を、因果モデルを仮定した共分散構造分析を適用して仮説検証する。＜仮説 1＞「I A C から学習性無力感の下位尺度に対する影響力のパスは、U A C より有意に高い値を示す」。＜仮説 2＞「I A C からネガティブな自動思考の下位尺度に対する影響力のパスは、U A C より有意に高い値を示す」。＜仮説 3＞「I A C から回避傾向の下位尺度に対する影響力のパスは、U A C より有意に高い値を示す」。

方法 ＜調査対象者＞大学生 229 名（男 80 名、平均年齢 18.75 歳、女 149 名、平均年齢 19.04 歳）。＜測定尺度＞エゴグラム I U E の下位尺度 I A C および U A C 各 8 項目。学習性無力感尺度の下位尺度「失敗に対する過敏性因子尺度」10 項目、「自尊心の欠如・劣等感因子尺度」10 項目。ネガティブな自動思考尺度の下位尺度「将来に対する否定的評価因子尺度」10 項目、「自己に対する非難因子尺度」10 項目。回避傾向尺度の下位尺度「対人苦手感尺度」9 項目と追加 1 項目、「傷つき防衛因子」を想定した 10 項目。「次のように思うことがよくある」から「まったくない」までの 4 件法で回答を求めた。＜統計手続き＞各尺度の項目間相関に対して主因子解とバリマックス回転を複数回施行して項目精選を行い、単純因子構造を構成する精選尺度に対して Amos16.0 Graphics を適用した。

結果

学習性無力感の「失敗に対する過敏性」およびネガティブな自動思考の「将来に対する

否定的評価」と「自己に対する非難」において IAC からのパスが UAC より有意に高かった（それぞれ $p < .001$ ）。仮説 1 は部分的に支持され、仮説 2 は支持された。IAC から対人回避傾向下位尺度に対するパスは有意であったが、UAC からも有意なパスがありパスの差は有意でなく、仮説 3 は支持されなかった。

考察 <学習性無力感に対する影響>自己自身が「無力な子ども」の状態になる IAC が高くなると積極的な達成意欲を低下させ、無力感を助長することが示された。<ネガティブな自動思考に対する影響> IAC が高くなると自分に失望し自己非難するような考えがしばしば浮かぶという、ネガティブな自動思考にとらわれやすくなることが明らかになった。<回避傾向に対する影響> IAC と UAC はともに他者を脅威に感じ緊張したり身構えたりする構えをもたらした。IAC と UAC に反映される自己に対する否定的な不全感 は 自他に対する信頼感を失わせ、他者との関係において回避防衛的傾向を強化することが示唆された。

研究2

目的 UAC 得点が上昇するにつれて IAC より優位に作用すると予測される心理機能を、因果モデルを仮定した共分散構造分析を適用して仮説検証する。<仮説 1>「UAC からドライバー「他人を喜ばせよ」の下位尺度に対する影響力のパスは、IAC より有意に高い値を示す」。<仮説 2>「UAC から依存欲求の下位尺度に対する影響力のパスは、IAC より有意に高い値を示す」。<仮説 3>「UAC から同調行動の下位尺度に対する影響力のパスは、IAC より有意に高い値を示す」。

方法 <調査対象者>大学生 230 名（男 115 名、平均年齢 19.74 歳、女 115 名、平均年齢 19.58 歳）。<測定尺度>エゴグラム IUE の下位尺度 IAC および UAC 各 8 項目。ドライバー「他人を喜ばせよ」尺度の下位尺度「気配りをする傾向」5 項目と追加項目 5 項目、「他者評価を気にする傾向」5 項目と追加項目 5 項目。依存欲求尺度の下位尺度「情緒的依存欲求」10 項目、「道具的依存欲求」10 項目。同調行動の下位尺度「仲間への同調」10 項目、「自己犠牲・追従」10 項目。「次の質問にあてはまることがよくある」から「まったくくない」までの 4 件法で回答を求めた。<統計手続き>各尺度の項目間相関に対して主因子解とバリマックス回転を複数回施行して項目精選を行い、単純因子構造を構成する精選尺度に対して Amos16.0 Graphics を適用した。

結果 ドライバー「他人を喜ばせよ」下位尺度に対する UAC からのパスはいずれも低く、IAC と有意な差はなかった。依存欲求の下位尺度「情緒的依存欲求」に対して IAC からのパスが有意に高い値を示した。同調行動下位尺度「自己犠牲・追従」に対して UAC からのパスが IAC より有意に高かった。仮説 1 と仮説 2 は支持されなかった。「情緒的依存欲求」へのパスは仮説 2 と逆の結果を示した。仮説 3 は「自己犠牲・追従」に関してのみ支持された。予測は一部しか支持されなかったが、個々の独立変数と従属変数の関係から、UAC と IAC が表す心理機能について探索的な示唆が得られた。

考察 <ドライバー「他人を喜ばせよ」に対する影響>UAC と IAC の機能には他者

を脅威に感じる意識が内在しており、相手が自分に対して持つ評価や好意に敏感になる傾向を示すドライバー「他人を喜ばせよ」と共通した意識が、「他者評価を気にする傾向」に影響していることが伺えた。＜依存欲求に対する影響＞UACはIACほど不安の癒しを他者に求める情緒的依存欲求と結びつかないことが示唆された。UACもIACも自分の困難を解消するために他者を利用するという、道具的な依存欲求と関連が低かった。UACは他者から排除されないこと、否定的評価を避けることという消極的な社会的承認希求意識を喚起させることが伺えた。＜同調行動に対する影響＞UACは攻撃的な雰囲気や苦痛を感じ、対立・葛藤を避けて和やかな関係を維持しようとするように作用し、IACは他者追従には作用せず、むしろ不安や抑うつ、孤独感、自己不全感など傷つきやすい不安定な心理状態をもたらすように作用することが示された。IACは不安をもたらすような状況や人に敏感であり、防衛的な安心を求める傾向を表すが、UACのような葛藤回避努力を伴う関係維持欲求とは結びつかなかった。

まとめ

IACに優位な心理機能 IACが強く作用することで、失敗を避けて傷つかないように自己を守ろうとする自己防衛的な意識が強まった。将来に対する悲観的思考や自己に対するネガティブな認知にとらわれやすくさせ、絶望感や他者からの拒否を恐れる意識を高めた。他者からの圧迫感を受けやすくさせ、防衛的な構えを取りやすくさせた。人との心理的接近を回避することで他者からの脅威を避ける傾向を示した。無力で見放された孤独な「子ども」が安心を求めて他者に執着したり、逆に内面の安定を脅かされるような事態に対し、回避による安心を得る傾向が強まることを表していた。

UACに優位な心理機能 UACが強く影響する従属変数は、相手に受け入れられ和やかな関係を維持できるように自分の欲求や感情、主張を抑制しようとする社会的承認欲求の強さや関係崩壊への強い不安を伺わせた。否定的な評価を恐れて人の思惑にとらわれ追従努力をするという他者順応的な意識が見られた。UACはIACに比べると接近的な対人意識を表しているが、能動的に他者に貢献することや対人関係を利用する働きよりは、承認を得るため受動的に対人関係を維持しようとする機能が優勢であった。

本知見の示唆 先行研究で、カウンセリング来談者を主訴に基づき症状類型に分類して、類型間でIUE下位尺度値の比較を行った。IACが最も高かったのは「不安・恐怖」、「憂うつ感」等を主訴とする不安抑うつ群であった。UACが最も高かったのは「人前で緊張」、「悪い評価を恐れる」等を主訴とする対人緊張群であった。本研究の知見を適用すると、不安抑うつ群のクライアントは、苦痛を招く思考や無力感・不安回避などIACが優位に作用する心理機能が優勢であり、対人緊張群のクライアントは、強い社会的承認欲求や自己抑制・追従などUACが優位に作用する心理機能が優勢であると推測される。臨床場面に限らず産業場面や教育場面など他の領域でも心理的問題の理解において、本研究の知見を適用することで対象者の心理状態をより詳細に推測できると考えられる。

(要約者：西川和夫)